後期高齢者の自伝的記憶におけるバンブと適応の関連

○田中京子¹・原口雅浩²・稲谷ふみ枝²

(1久留米大学心理学研究科・2久留米大学文学部)

キーワード: 自伝的記憶, 後期高齢者, レミニセンス・バンブ

Reminiscence bump and Adaptation in the old-old autobiographical memory

Kyoko TANAKA¹, Masahiro HARAGUCHI² and Fumie INATANI²

(1Graduate School of psychology, Kurume Univ., 2Faculty of Literature, Kurume University)

Key Words: autobiographical memory, the old-old, reminiscence bump

目 的

自伝的記憶とは、人が人生において経験した出来事の記憶である(佐藤, 2007)。出来事を経験した年齢により、生まれてから現在までの時間軸(ライフスパン)上に布置すると、自伝的記憶の分布には、10代~30代の出来事の想起量が多いレミニセンスバンブ(以下、バンブ)がみられる。バンブは高齢者に頑健にみられる現象である。

老年期の発達課題は自我の統合と絶望(Erikson, Erikson & Kivnick, 1986 朝長・朝長訳 2002)であり、高齢期のバンブ現象はエリクソンの発達課題と重なる(Conway & Holmes, 2004)。また、バンブの時期の10代の記憶はアイデンティティの形成を反映する(Holmes & Conway, 1999)。このことから、バンブと自我の統合とは関連があると考えられる。さらに、和田(1979)によると、社会老年学では、高齢者個人が、彼の満足度と幸福を最大にしている状態を高齢者が老化に対して適応している状態と同義であるとみなされている。これらのことから、10代にバンブ現象を示すものは適応性が高いと考えられる。

そこで、本研究では、後期高齢者の自伝的記憶におけるバンブ現象と適応の関連を検討した。なお、自伝的記憶の想起の手がかり語は、一般的に用いられてきた単語(以下、一般手がかり語)に加え、想起が容易と考えられる五感に関する単語(以下、感覚手がかり語)を用いた。

方 法

調査協力者 後期高齢者 22名 (M=80.5, SD=3.17)

調査期間 2012年2月~6月

調査項目 ①EPI (Erikson Psychosocial Stage Inventory: エリクソン心理社会的段階目録検査) 日本版(中西・佐方, 1993)の一部である統合性。7項目(5件法)。

②生活満足度尺度K(LSIK)(古谷野・柴田・芳賀・須山, 1990)。老いへの適応を測る尺度で、人生全体についての満足感、心理的安定、老いについての評価の3因子から成る(9項目)。

刺激材料 感覚手がかり語(例: 音, におい, 色)を6個、一般手がかり語(例: 花, 海, 本)を6個用いた。

手続き 個別に手がかり語から想起された出来事とその時期の年齢を尋ね、手がかり語ごとに繰り返した。

結 果

想起の型(バンブの有無) 記憶の生起数をk-means法によるクラスター分析(JMP8, SAS)をした結果、一般手がかり語は10代が最も想起される「10代バンブ」群とバンブがみられない「バンブ無」群であったが、感覚手がかり語は「10代バンブ」群と10代バンブに加え最近の記憶も想起される「10代バンブ+最近」群に分類された。

統合度 想起の型(バンブの有無)を独立変数とし、EPI(統合度)得点を従属変数として1要因参加者間分散分析を行った結果、一般手がかり語では、「10代バンブ」群は統合度が高い傾向にあった($F(1, 21)=3.03, p<.10, \eta=0.13$)が、感覚手

がかり語では、「10代バンブ」群と「10代バンブ+最近」群には差がみられなかった($F(1, 21)=1.94, n.s., \eta=0.09$)。効果量は中程度であり、10代にバンブがみられると統合性が高い傾向にあるといえる。

図1 想起の型(バンブの有無)と統合度

生活満足度 想起の型(バンブの有無)を独立変数とし、生活満足度得点を従属変数として、1要因参加者間分散分析を行った結果、一般手がかり語では、「10代バンブ」群と「バンブ無」群とは差がみられなかった($F(1, 21)=1.21, n.s., \eta=0.06$)。感覚手がかり語においても「10代バンブ」群と「10代バンブ+最近」群には差がみられなかった($F(1, 21)=0.23, n.s., \eta=0.01$)。効果量は小程度であり、バンブがみられると生活満足度は高い傾向にあるといえる。

図2 想起の型(バンブの有無)と生活満足度

まとめ

後期高齢者の自伝的記憶の想起における想起の型(バンブの有無)と適応について検討した結果、10代にバンブがみられると、統合度や生活満足度が高い傾向にあり、適応性が高いことが示唆された。このことから、後期高齢者のバンブの時期である10代の記憶は、老年期の発達課題である統合や老いへの適応を反映したものと考えられる。今後は、自伝的記憶の発達の变化や適応との関連を探るため、自伝的記憶を繰り返し想起させることが必要である。